

研究室紹介

福島大学理工学群共生システム理工学類



気圏環境解析研究室 渡辺 明

(<http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~may/>)



1948年	栃木県大田原市生まれ
1967年	気象庁採用
1978年	福島大学出向(助手)
1979年	福島大学講師
1983年	福島大学助教授
1996年	福島大学教授
2010年	福島大学理事・副学長
2012年	福島大学教授
2014年	福島大学特任教授

●**研究内容** 人見知りでなかなか人とフランクに話せない性格で、自然を相手にする仕事なら大丈夫ということで気象庁に入りました。観測と数値予報などの仕事に携わってきましたが、現業は昼夜勤務で、寝食をともにする職場で、人見知りではすまなくなって、相当鍛えられました。しかし、そのお陰で、社会人としても、研究者としても成長できました。当初、大気中の重力波に興味を持って研究をし、航空機のCATの予測などを研究していましたが、気象庁から福島大学に出向することになり、猪苗代湖の湖陸風循環やヤマセなど meso 循環に興味を持つと同時に、気象災害に興味を持つようになり、豪雨や豪雪、突風災害などの解明に取り組んできました。こうした中、ナイトスモッグの環境科学特別研究が1982年からスタートし、多くの優れた研究者とオキシダントの観測や解析を meso 気象の観点から研究することができました。大気環境学会とのつながりはここから始まり、学生とともに1988年に始まった酸性雨の観測は今日も継続しています。

●**3.11と研究** 東京電力福島第一原子力発電所の事故は、事故の大きさはもとより、大学や研究者の使命や生き方まで変える大きな出来事でした。放射能関連の仕事は、ずぶの素人ですが、事故の前線にある大学として、測定や研究の要請が急増し、事業者はもとより、国をはじめとする自治体の広報も信用を失墜する中、科学的機関としての役割を果たすために、必死に事実を観測して、広報してきました。お陰で、私の研究室は飛行船による放射線計測、L-band、X-band radarによる、風、雨の観測、Lidarによる粉じんの観測、蛍光X線分析、ハイポリウムサンプラー(写真参照)に併せて、その運動を理解するための simulation などが完備する研究室になりました。また、放射能ゾンデ観測は、世界に類を見ない観測として実施していますが、1基30万円の使い捨ては、なかなか緊張する観測です。放射性物質が低減する中、専門家が継続的に研究することが福島市の安全・安心に繋がるものと考えて、これまでさまざまな観測を実施してきましたが、放射性物質に関する研究は学生の希望が無い限りさせないのが福島大学の立場で、私の研究室はやっぱり気象の好きな学生が入ってくるのですが、放射能汚染については、土日も関係なくサンプリングする関係で希望者がおらず、私一人でこれらの観測機器類を毎日管理しています。

●**私の宝** 人見知りで始まった私の研究は、3.11の原発震災を含めて多くの方々に助けられてきました。改めて自分の研究生生活が多くの人の支援によって支えられていることを実感した機会でもあります。今まで言葉を交わしたことのない多くの方が、研究室に来てデータ整理や観測機器の設置などを行ってくれました。現在、観測が実施され有用な事実が観測されているのはこうした方々の支援の賜物なのです。まさに「人との繋がりがこそ私の宝」です。

●**鈴木裕也** 私たちが所属する気圏環境解析研究室(通称:気象研)は、とてもアクティブな研究室です。学会発表はもちろんのこと、裏磐梯の五色沼観測や月に一回ゾンデ観測を行うなど、自分の研究課題だけではなく多岐にわたる研究を行っています。また、X-band Dopplerレーダーや境界層レーダー、ドップラーライダーといった観測機器が充実しているのも気象研の特徴でもあります。研究室自体も閉鎖的ではなく、他の研究室の学生や来客者の方々とお茶をするなどアットホームな研究室でもあります。研究室は少人数ですが、その分先生とゼミ以外でも頻りに議論ができるので、より有意義な研究を行うことができます。

●**藤井一輝** 気象という難しい分野に最初は不安がありましたが、先生や先輩からの手厚い指導のお陰で、順調に楽しく研究を進められています。研究室は、適度な緊張感と落ち着ける雰囲気があり、また気軽に質問ができる環境なため、安心して研究に取り組めます。

